

大震災から1週間経ち、この原稿の筆をとりました。今、日本のここそこで、日々の穏やかな暮らしや、人びとの間の温かなやりとり、美しい自然とともにある大地……大切なものに気づき、愛しむたくさんの声が響いています。被災地の方たちが、日本人が、必死で「生き抜くこと」をみんなが励まし続けています。その背景には無数の生と死をめぐる切実な想いがあるのだと感じます。

東京で被災地を映す報道を見ても、ご遺体は数で表されるものの、凄惨なその光景に視聴者が自らの目で触れることはほとんどありません。そんな中、「ガソリン不足でご遺体が見つかって家族に返せない。遺体搬送車を緊急自動車指定にしてガソリンを優先的に回してほしい」という被災地の方の声をニュースで聞きました。「早く火葬してせめてゆっくり眠らせてあげたい。亡くなった方に人間としての最後の尊厳を」と。

こんな映像も見ました。津波でなにもかも押し流された後の見渡す限りの泥地に、一人たたく白髪のご老人。姉・妹さんをこの震災で亡くされたといひます。「うちの軒先に、チューリップの球根を五百個位吊りしてたの。この辺一帯にさーっといっせいにチューリップが咲いたらきれいだなあ、と思っつて」そう言いながら、数日前までご自宅があったその場所を愛しそうに眺めている。死を乗り越えた先に、これから花のように咲くはずのたくさんの命、人も動植物も大地をも含み込んだ、あらゆる生の輝きを身通すかのような、その遠い眼差しに感銘を覚えました。

本来であれば、こんな時に書く文章は励ましの言葉、明るい話題であるべきでしょう。しかし悩んだあげく、今回は敢えて私が中国・陝北で見て考えた身近な死について書くことにしました。それは、震災のただ中にある日本に身をおいてみて、私自身がこれまで陝北農村で日々感じてきた、生と死が隣り合わせにあるという現実が、まさに今、この国で実感されるからです。死を身近に感じることは、生を身近に感じて渴望することに他ならないと、陝北生活で教えられたこと、その時の戸惑いを近頃、鮮明に振り返っている自分があります。久々にかつてのフィールド日記をめぐりつつ、今この時にあって思い出された出来事を、素直に紙に落としてみたいと思います。



白ウサギのお墓とお葬式

2009年8月29日の日記の冒頭。「今日は茅房(家の外にある共用トイレ)に極力行かないよう、夜まで我慢していた。下に昨日まで我が家で鳴いていた黄色いものがチラチラと見えているから」下とは、土を掘っただけのボツ

トン・トイレの穴の下、黄色いものとは同室の子どもたちが飼っていたヒヨコです。

この日の日記はこう続きます。

……動物の死は日常に転がっている。まずは生贄となる家畜。雨乞いの儀礼で殺すのはきまって雄豚。雌豚は女であり、神への捧げものにはならないのだという。先月に見た、県の劇団の公演では、大学に合格した主人公を前に彼女が大喜びで“鶏を絞めよう!”という台詞があったが、今の日本で言えばさしずめ「お赤飯炊こうね!」といったところか。

ペットの死も日常茶飯事だ。今夏のサンワ一村滞在で最初に受けた衝撃は、毎晩一緒に寝ていた猫が産んだ3匹の仔猫たちが、1週間もたたないうちに野良猫に共食いされたという事件だった。その直後、母猫は本当に悲しそう顔で中庭で終始ぼうっとしていた(私自身の落胆がそう見えさせたのか?)。おかみさんも子猫の死に怒り心頭。子猫たちは2匹はまるまる食べられたが、1匹は庭に半分死骸が残されていたという。おかみさんは野良猫が腹いっぱい食べきれないのに3匹目に手を出したことにひどく腹をたてた。彼女は仔猫の亡き骸をシャベルの上に乗せて堆肥の山に運び、その中に軽く沈めた。

近所のSおじさんの家で見つかった3日前に生まれたばかりというかわいい10匹の子犬も、数日後には3匹になっていた。もらい手がいないだろう、ということで間引きした、という話だった。

そして昨日、ヤンズ(下宿先の家の女兒、2歳)の白い子うさぎが死んだ。一昨日は胡瓜をやるとポリポリ食べていた。抱くとほんのりと暖かくて、しっかりと生命の感触があった。しかし子供たちが力加減を知らず強く握りしめたからか、とにかく原因不明で突然死んでしまった。昨日、私がマオゴウ(ヤンズの姉、7歳)とアニメを見ていると、ヤンズが「マオゴウ姐姐」と大声で叫びながらヤオトンのドアを叩いた。手をひかれて見に行った時、うさぎはまだ眠っているかのようで、私には生死が判別できなかった。しかしマオゴウの行動は素早かった。小雨が降り始める中、すぐにうさぎの埋葬が始まった。

中庭入口の家庭菜園の一角に木枝で穴を掘りながら、マオゴウは唱え文句のように「可哀そうな白うさぎ」と繰り返す。それをまねてヤンズも何度も口ずさむ。うさぎを穴に入れて土をかぶせると、マオゴウは用意した短冊状の紙の切れ端を穴に埋め始めた。いびつな字で「おやすみ汽車」や「飛行機」などと書かれた短冊は20枚くらいあったらうか。「わたしが白うさぎのために書いたの。うさぎ

が飛行機や宇宙船に乗れるように。「おやすみ汽車」は、うさぎが冥界への汽車の中でぐっすり眠れるように、という意味らしい。「うさぎをここに住まわせてあげるの。誰かが掘り起こしたらペンペン叩いてやるんだ」。墓の上に短冊を数枚重ねては土をかぶせ、水をまわしかけて足踏みをして踏み鳴らす。「ここに埋めたからには、どんなことをしても守らなきゃ。隠れられるようにいっぱい土をかけてあげたよ」。

その後、マオゴウはヤオトンの中から、私が唯一自分に戻れる時間＝コーヒータイムに愛用しているプラスチック製の白いスプーンを持ち出した。それを墓の真上から突き刺す。「これを“記号”(しるし)にするんだ。白うさぎは白いから、白いしるし」。これを聞き、下に死んだうさぎが埋まっていると思うと、「スプーン返して」とはとてもじゃないが言う気になれない。マオゴウはそんな私の気持などおかまいなしに、白スプーンのまわりに土をこんもりと盛り上げていく。「白うさぎにミルクをあげる」と飲み終わった牛乳パックに水を入れて墓の上からぐるぐるとまわしかけ、その上からさらに土を盛り、踏み鳴らしてまた“牛乳水”をかける。次に庭の木の葉を山ほどむしりとってきて、墓の白いしるしを葉で囲んでいく。最後に塀から抜きとった2つの煉瓦を、白いしるしを挟み込むように墓の上ののせた。

「出来た！ 私たち出発進行！ イェーイ！」と鼻歌を歌いながら、中庭を行進する子どもたち。うさぎへの哀悼はいわずこ、墓を作り終えた満足感に酔いしれているかに見える。埋めきれずに放り出された短冊が次々と山の風に飛ばされていく。その後、南瓜の黄色い花、種でいっぱいひまわりの花も供えられた。贈り物はさらに続く。大切にしているブリキのおもちゃ、おばあちゃんがくれた髪飾り…「いちばんの親友だったから。わたしのことを咬まないし、叱ったりしないし、すごく仲良くしてくれた」とマオゴウ。小さなヤンズがたたみかけるように「小宝貝(かわいい赤ちゃん)」と唱え続けた。

一夜明けて今朝、朝食を食べに食堂のヤオトンに行くと、今度は入口脇の椅子の上の箱に見慣れない2匹の

ヒヨコが入っていた。昨晚、隣のヤオトンでやたらとピヨピヨうるさかったのはこいつらか、と思って眺めると、1匹をもう1匹が踏んづけている。「もしかして、こっちは死んでるの？」と尋ねると、「そう、死んだ」。みんなは何事もなかったように、大きな花巻を口にほうばっている。マオゴウが大人たちの会話を遮って突然演説を始めた。「白うさぎは茅房に捨てるわけにいかない」。私は彼らの中の命のランキングを想像して、頭を混乱させた……。

✂️ 白ウサギのお墓とお葬式

小さなマオゴウとヤンズによるうさぎの墓とお葬式は、この土地の大人たちの葬礼を見事に真似たものでした。風水師が選んだ方角のよい場所(多くの場合、畑の中)に、ドーム状の深い穴を掘ってしっかりと固め、生者が住むヤオトンに似せて作られる土の墓。葬儀1日目には、御遺体の棺が置かれたヤオトンの外に祭壇を設え、遺影のそばに「紙火」と呼ばれる紙製の家や車など、死者が「陰界」(冥界)でより豊かな暮らしができるための品々を、豚肉などの食べ物と合わせて供えます。翌朝、棺は家からお墓まで大行列で運ばれます。埋葬時、風水師は「東西南北には行くな。天にも昇るな。ただ地の下に行け」と死者に向かってきつく命じ、棺を安置した墓穴を分厚い石板の戸によって塞ぎ、陰界との出入り口は断たれます。上から厚く盛り土をして墓は完成。

墓前には「紙火」や参列者が持参した「花圈」と呼ばれる紙製の花輪が並べられ、一気に燃やされます。燃え残りはそのまま放置され、いずれ風がどこかへ運んでいきます。その後のお墓参りでは墓前に花々や食べ物がちぎって供えられ、上から酒を何度も回しかけます。

子どもたちのうさぎのお葬式は“略式”ではありますが、即興でテキパキと儀礼をこなしていく姿に、私は感心させられました。死というものに対する7歳の子どもの対処の仕方は、まさに大人たちのその観察の賜物なのでしょう。

陝北でも老人の葬礼は「白喜事」といい、天寿を全うしたおめでたいこととされます。御遺体には「寿衣」と呼ばれる紅い絹の死装束を着せますが、多くの場合、これらは高齢になった親への孝行として子らが以前から来た日に向けて準備しているものです。経済的に豊かになった近年は、葬儀の夜に花火が打ち上げられ、裕福な家の葬儀はさながら盛大な花火大会のようです。

その一方で、農村では今でも、12歳未満の子供が亡くなると男親が人里離れた山や川に置きに行く、という話をしばしば耳にします。子どもはまだ人間界(「陽界」)にしっかり根づいておらず、いつでも魂を「陰界」に引き戻される可能性がある。そこで、病気がちの子



うさぎのお墓を作るマオゴウ



色々な供え物で飾られたうさぎのお墓



葬儀で死者に供えられた「紙火」(紙製の供物)の家。この「紙火」の家は、ヤオトン式の地階にコンクリ製の2階部分をもつ最新式の豪邸。自家用車やバイクも停まっている。

供には銀の鍵を首からぶら下げて命に鍵をかけたり、背中から大蒜をぶらさげて悪い「鬼」(霊)を追い払ったりと親たちは苦心するのです。子どもの健やかな成長を願う剪纸も刺繍も、そんな日常にありふれた「子どもの死」と表裏の関係にあります。また12歳を過ぎた青年が未婚のまま亡くなると、同時期に亡くなった同年代の娘を探して墓を隣に作る「冥婚」が行われます。こうして伴侶を得ることで「人」になったとみなされ、その一族の子孫繁栄が保証されると言います。「大人」になって生き抜くとはなんと大変なことでしょう！

冬寒くなると街では自然とお葬式も増え、毎晩のように空に花火が上がり、どこからともなく賑やかでちょっとセンチメンタルな節の笛の音が響きわたります。そんな冬の花火を見るにつけ、激動の時代をくぐり抜けて天寿を全うしたであろう、日焼けした深いしわが刻まれた陝北のお年寄りの顔を思い浮かべ、心からの敬意を払わずにはられません。

過疎が進む陝北の農村には、老人ばかりという村が数多く存在します。1999年以降、黄土高原の環境保全のため果樹栽培が半ば義務づけられてからは、収穫期のみ街から帰省する家が多くなり、中には数十戸からなる村に、住んでいるのは老夫婦ひと組だけというケースもあります。ご老体に鞭打って山道を牛を引き引き水汲みに通う姿を見て、「なぜ、街の子どもと一緒に住まないの?」と尋ねると、きまって同じ答えが返ってきます。「ここに埋められたいから」それはこの土地に土葬して欲しい、という切なる願いを意味します。延安などの都会で死ぬと火葬を余儀なくされるため、どうしても村を離れたくないというのです。

農村の深い谷の山肌には、草木が生い茂り、人が入り込めない場所に古い世代のお墓が並んでいます。どこに墓があるかも既にあやふやです。子孫たちは親や祖父母の墓参りの後に、そんな古いお墓の近くまで行き、大地に跪いて供物と酒を振り撒き、紙銭を燃やして爆竹を鳴らした

から叫びます。「大勢の御先祖さま～、またちゃんと来ましたよー！」そんな光景に出会うたびに、とっくに黄土の山に同化しているだろう古き御先祖様たちが、山々にこだまする爆竹の音に苦笑している姿が想像され、ほほえましく思われます。

✂ 魯迅の墓

最後に「偉大な死」に触れて筆をおきます。先日まで魯迅の箴言集を作っていた関係で、魯迅をめぐる日中の作家や親交のあった人々の文章に多く触れる機会を得ました。中でも作家・堀田善衛が書いた「魯迅の墓」という文章は印象的でした。1945年、上海にいた堀田が見に行った万国公園の魯迅の墓は、白い墓石が立っているだけのつつましやかな土葬の墓で、草もぼうぼう。「『葬』という字は草の間に死をほうり出すということだと聞いたことがあったが、それはまさにそのようであった」と堀田は回想しています。解放後、魯迅の墓は現在魯迅公園となっている場所に移され、巨大な魯迅像や毛沢東の筆による墓碑が設置されました。堀田は「それはいわば魯迅個人の墓ではなくて、死んだ魯迅が中国人民の歴史と意志のなかにうつしおかれたということの意味する。それはそれでいい」と言いつつも、そんな栄光は「私はごめんを蒙ります」と書いています。

日本と中国の狭間にあって自らの意思を貫き、常に自らと大切な人たちの生と死に向き合いながら生き抜いた魯迅。彼自身は家族への遺言として、自分の死後「いかなる記念に関することもしてはならない」「私のことは忘れて、自分の暮らしを大事にすること」と記しているのですから、死んでから中国革命の聖人に祭り上げられたこの故人は自らの墓をどう見ているだろうか、と問わずにはられません。

動物、植物、そして人間。それら生き物の一つの命が途絶えた時、後に生きる者はその死とどう向き合い、どう扱うのか。正解などどこにもないけれど、日常から死を隠さず、死、そして死者を身近に感じながら暮らすことで、生もまた違った意味を帯びるのではないかと。少なくとも、陝北の山々に散在するお墓や死者たちは、生と死の繰り返しを育み続ける大地を、健やかなるままに次世代に引き継いでいくことの大切さを語りかけているように思われなりません。

✧ 丹羽朋子 (にわともこ)

東京大学大学院文化人類学研究室、博士課程在籍中。中国陝北の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」のメンバーとして活動中。一芯社ウェブサイト (<http://yixinshe-books.jimdo.com/>) に掲載中。